

---

# あなたがついててくれるなら。

十六夜 あやめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたがついててくれるなら。

### 【ΖΖコード】

Ζ4987Y

### 【作者名】

十六夜 あやめ

### 【あらすじ】

通学途中の電車の中で出会った女の子。同じ学校の制服を着た少女は、なぜか身体を密着させてきていたのに泣いていた。焦る主人公に降りかかる不幸。

これは、勇気で一人の女の子を救った男の子の物語。

次の停車駅は、××駅、××駅、××駅の順で止まります。まもなく××学園前。

眠る前、酔つた親父によく言われたことがある。

いいか！ 男なら困つてる女の一人や二人助けてやるんだぞ！

いま俺は満員電車の中にいる。息をするのも苦しいくらいぎゅうぎゅうだ。

手を動かすのも難しい。けれど……動かさないとマズイ……。

なあ、親父？ 僕が困つたときはどうすればいいんだ？

このままだと捕まりそうなんだけど……。

親父が助けてくれるのか？

俺の前に同じ高校の制服を着た女子生徒がいる。その子の身体に俺の腕が触れていた。それなのに、密着するその子は瞳を潤ませて涙をためている。

……おいおい。泣くのだけは勘弁してくれ。たのむ！

田をつむったその子は俺の右腕に抱きつぶ。下を向いて、「ごめんなさい」「や「すいません」と謝っていた。傍から見たら俺は痴漢として見られているかもしない。だが、それは誤解だ。せつときからこの子、自分から体を押しつけてきているのだ。

「んっー。」

「ちょっー。マジで変な声出すなよ……。勘違いされたらどうするんだよ……。俺は悪くないのに、16歳で捕まっちゃうのかな……？」

「お願いですー！このまま離れないで下さいー。お願いしますー！」

涙をためた顔を上げ、小さな声で必死にうつたえてくる。右腕をぎゅっと掴んで、何度も何度もお願いしますと言っていた。  
え？ ストーカーにでも追われてるのか？

周りを見渡したとたん、もたれ掛っていた方の扉が開いた。体勢もままならない状態で乗客の波に押される。左足だけが外に出て、俺にしがみついていたその子と右足は絡まっていた。バランスを崩した俺は、押されて突き飛ばされてきたその子と一緒に転んだ。

「うつてえー……」

「ねえ、やだ、何あれ！」  
「もしかしてチカン！？」

他校の生徒や会社に向かつサラリーマンの人たちがこつちを冷たい目で見て、つぶやいている。

「えつ？」

その子は俺の上に倒れ込んでいて、足が絡まつたまま、スカートがめぐれ上がっていた。おまけに涙を流している……。

「駅員さん！ チカンがいます！」

「あそこです！ 早く早く！」

「ちょっと……違う。

「誤解だあー！ 誤解なんだあーー！」

その子の手を握つてその場を走り抜けた。

「お願いします！ トイレに行ってくださいーー！ お願いします！」

言われた通り、俺は駅のトイレまで走る。階段を駆け下りて左に曲がったところにあつたはずだ。

あつた！

「あの、『めんなさい。ちょっと来てくださいーー！』

その子に手を引きずられて、まさか 女子トイレに入つてしまふなんて想像もしていなかつた。

運よく中には誰もいみたいた。朝だが、掃除用具の入った扉を開けて、清掃中の看板を取り出し、素早く入り口に立て掛けた。

……これでたぶん人は入つてこないだらつ。

「あのさあ……もつそろそろ手を離してくれるかな？」

「え、でも、その、無理です……」

「無理って……。さすがに俺だって無理だよ？ いい年の男子が公共の女子トイレにこもるの見られたら捕まるし……」

「す、すいません！ でも、その……」

何か事情があるのはわかつた。電車の中にいたときも、いまも、何かに怯えている様だった。それが人でないこともわかつた。トイレに逃げ込んでからは落ち着いているからだ。いったい何に怯えているんだ？

「わたし……」じりじりきょくうふしようなんです

「はい？ え、なに、電車に乗つてる高をすりも怖かつたの？」

「あ、いえ、違います。えっと、広いところが怖いと書いて、広所恐怖症なんです。あ、正確に言つと広所孤独恐怖症です。前まではずっとお母さんとかお兄ちゃんとかに付き添つてもらつて登校してたんですけど、お母さんは仕事が忙しくて、お兄ちゃんは遠くに就職していくなくなちゃつて……。隣に誰かがいっしょにいてくれたら大丈夫なんんですけど、広いところに一人だと視界がぐらつこちやつて。だから、一人の時は狭いところから徐々に広いところに出て、広さに慣れないと倒れちゃつたりするんです……」

「じゃあさ、田をつぶつて登校したら？」

「えー？ それは無理ですよ、ぶつかっちゃつ……」

にしても、初めて聞いたぞ。なんだよ、広所孤独恐怖症つて。よ

くじままで生きてこれたなあー。

「…………迷惑かけてごめんなさい。わたしこんな感じだから、いつもいじめられるんです。その度にお母さんとお兄ちゃんに迷惑かけて、今日なんか知らない人にまで迷惑かけて……。でも私もみんなといつしょに登校したら、普通に楽しく過ごせてると思うんです。放課後も一緒に帰つて、喫茶店とかクレープ屋さんに寄つたり、買い物したり、恋愛話したり、そんな生活を送りたくて、今日は一人で来たんです……」

いいか！ 男なら困つてゐる女の一人や一人助けてやるんだぞ！

俺は彼女の手を握つてトイレを駆け出る。

「ちょっと、待つてください！ 本当にいきなり広いところに出た  
らわたし……！」

彼女の足が止まつた。目から大粒の涙が今にも零れ落ちそうだ。  
彼女の口から小さく嗚咽がこぼれはじめる。

「う…………ふえ…………うう…………」

握つていた彼女の手を放す。その瞬間、一気にたまつていた涙が零れた。

俺は彼女の視界を奪つよう身体をきつく抱きしめた。

「えつ……」

「いじられれば平氣なんだろ？ ひとりが苦手なら俺がいてやるよ。俺が隣にいれば広いところも大丈夫だろ？」

「えつ、うん………… ありがとう」

「親父。これでいいのか？ 俺に出来ることをした。困っている女の子を助けたぜ。めっちゃくちゃ恥ずかしいけど……」

今週の日曜日。

「す」「——」

「おい、あまり大きな声出すなよ」

「だつて！ 私じつは所来るの初めてなんだもん！」

「こんな広いところ來て本当に大丈夫なのかよ……」

「平氣だよ！ だつて………… あなたがついていてくれるなら怖くないから」



(後書き)

読んでいただきありがとうございました。  
ひそしぶりに投稿しました。  
感想・ポイント評価・コメント・なんでもいいのでお気軽に  
書き込みしてください。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4987y/>

---

あなたがついててくれるなら。

2011年11月17日19時52分発行